GUNMA INNOVATION AWARD 2022

オープニングで勢ぞろいするファイナリストたち

起業に情熱 視線世界へ

節目の第10回を迎えた起業家発掘プロジェクト「群馬イノベーションアワード（GIA）2022」（上毛新聞社主催、田中仁財団共催）は4日、ファイナルステージに16組が出場してビジネスプランを競った。県内4高校のダンス部員約100人は迫力のパフォーマンスを披露。10年を記念したパネルディスカッションでは、国内を代表する経営者である実行委員5人が、起業の意義や魅力を熱く語った。

大賞

イノベーション部門 入賞
エリー（東京都中野区）

梶栗　隆弘さん（36）

蚕のさなぎ 食資源に

群馬経済同友会の斎藤一雄代表幹事（左）から表彰を受ける梶栗さん

食品製造会社「エリー」は、蚕のさなぎを新たな食資源と位置付けて肉などの代替品に加工している。発表では地域と連携して原料の蚕を確保する「エリー式混合農業」を提案した。

これはキャッサバイモの生産と、養蚕を組み合わせた農業。まず農家に遊休農地を使ってイモを生産してもらう。同時にその葉を食べる特殊な蚕を空き家などで育ててもらい、できた繭を同社が買い取る仕組みだ。

キャッサバイモは不良環境に強くて栽培が簡単だ。主食とする国もあり、外国人労働者の増加によって日本国内でも需要は増加中。農家には餌となる葉を取った後に販売し、収益を上げてもらう。

この蚕は桑を食べる品種よりも丈夫で飼育がしやすく、タンパク質や必須脂肪酸も豊富という。この二つの栽培と飼育が「どこでも、誰でも、簡単に」できると紹介。イモの苗と蚕種、栽培や飼育のノウハウをパッケージとして提供する。

代替タンパク質を食品事業のトレンドと読み、2018年に事業を開始。品種改良の技術がある蚕なら世界的に戦えると考えた。大賞受賞について「素直にうれしい。来年から群馬で本格的に活動したかったので、いいきっかけになる」と喜んだ。

本社は東京だが、キャッサバイモが生産されて養蚕文化が根付く群馬での実証実験に合わせて明和町で暮らしている。「まずは群馬でモデルを確立し、この1～2年で年間3㌧の蚕をつくる。いずれ世界に展開したい」と力を込めた。

関東経済産業局長賞

ビジネスプラン部門 大学生・専門学生の部 入賞
中央農業大学校2年

加藤　貨代（たかよ）さん（39）

鳥獣被害対策に ボイセンベリー

農作物の鳥獣被害対策として、鋭いとげがあるキイチゴの一種、ボイセンベリーの苗を農家に提供し、それを使った垣根を畑などに設置。果実を活用した加工品販売を展開する事業を提案した。

本年度の農林水産省の調査によると、農作物の鳥獣被害額は161億円に上る。自身の畑も毎年被害に遭っていたが、偶然繁殖したボイセンベリーによって被害がなくなり、今回の事業を発案した。

ボイセンベリーはポリフェノールやビタミンCなど多くの栄養素も含む。近年注目されているが、生食では日持ちせず収穫期間も短いため、生産量が少ない。

こうした現状から耕作放棄地を利用して栽培した苗と、垣根を作るための資材を無償で農家に提供。収穫した果実を買い取り、ジャムや製菓に加工して販売し、未開拓のマーケットへの進出を狙う。

神奈川県で小料理店を営んでいたが、就農を目指して同校に入学した。「学校の支援で受賞できた。感謝しかない」と喜んだ。ボイセンベリーの垣根は特許出願中。「耕作放棄地を有効活用して鳥獣被害対策を進め、日本の農家を守りたい」と先を見据える。

関東経済産業局の太田雄彦局長（左）から表彰を受ける加藤さん

ビジネスプラン部門 高校生の部 入賞

市立太田高3年

久保田美波さん（18）
長瀬　　華さん（18）

企業が自社への応募に際して単願を求める高卒採用の「1人1社制」により、就職先が限られる友人たちの悩みを知った。就職を希望する高校生を募り、採用企業に代わってツアーガイドや社員から直接話を聞く機会をつくる「オープンカンパニー」を仲介するサービスを企画した。

サービスにより、高校生は求人票では分からない情報を知ることができ、納得した進路選択につながる。企業にとっても、採用のミスマッチを防ぐことができる。

ミスマッチ防ぐ就活支援

平田郁美県教育長（左）から表彰を受ける市立太田高の久保田さん（中央）と長瀬さん

高校1年時にGIAのステージに立つ先輩を見て、同じステージに立ちたいと憧れた。「一生を左右するかもしれない就活に悩みを抱える人も多い。いずれは悩みを解決できるサービスを展開していきたい」と話す。

ビジネスプラン部門 一般の部 入賞

共愛学園前橋国際大教授

村山　賢哉さん（42）

大学の授業動画 社会に

コロナ禍で増えたオンライン授業を取りまとめ、配信する動画プラットフォームを提案した。対面授業が制限された大学で急増したオンライン授業の動画を社会に還元し、活用するアイデアだ。

全国に大学教員は10万人超おり、コロナ禍を受け制作された動画は50万本超とされる。人文科学や社会科学、自然科学など多岐にわたり、多くの人の知的好奇心を刺激する。

世代を超えた学びのニーズを満たす上、若手教員の最新の研究・知見が反映された動画も多い。収益を教員と大学で分配することで、結果的に学生にも還元される。

村山さんはコロナ禍でアイデアが生まれた意義を強調。「学びは全ての世代に大切なこと。それに大学が貢献できれば幸せ」と笑顔で語った。

前橋市の山本龍市長（左）から表彰を受ける村山さん

スタートアップ部門 入賞

OZ（東京都千代田区）

横山　全希（まさき）さん（25）

古着販売に流行反映

古着をコーディネートしてセット販売する事業を紹介した。流行を反映した組み合わせや著名人の着こなしを意識したセットアップを提案し、若者の支持を集める。「決めることが苦手な若者が増える中で『選ばなくていい購入体験』を届けたい」と話す。

伊勢崎市出身。両親の離婚を機に都内の高校に進学し、「自分で食べていく力を付けたい」と起業家の道へ。いくつかの事業で失敗した後、2021年にOZを設立した。古着市場の拡大とともに急成長を遂げ、今期の売り上げは1億円を超える見通しだ。

「未熟で失敗だらけ」と謙虚さをにじませながらも、熱い思いを胸に抱く。「地元の群馬を拠点に10億円、100億円へと成長したい」

県商工会議所連合会の金子昌彦会長（左）から表彰を受ける横山さん

イノベーションマーケット

歴代ファイナリストや協賛社出展

32ブース にぎわう

歴代ファイナリストや協賛社が出展する群馬イノベーションマーケットは、新型コロナウイルスの影響で3年ぶりの開催となった。会場入り口近くに32ブースが並び、最新の製品やサービスを紹介した。

新鮮な野菜や斬新な発想で作られた菓子などが販売された。前橋市内で生産された蜂蜜の試食や骨の健康状態を測定するコーナーもあり、来場者でにぎわった。

LGBTなどの性的少数者や障害者の支援に取り組む団体も多く出展。群馬NPO協議会（同市）はNPO法人と企業の協働事例を紹介した。担当者は「社会課題に関心を寄せる企業が多く来ている会場で、新たな協働を生み出すきっかけにしたい」と話していた。

3年ぶりの開催でにぎわった群馬イノベーションマーケット

上毛新聞社 内山社長あいさつ

「起業家 原点大切に」

交流会

表彰式後に開かれた交流会には、16組の出場者をはじめ、審査委員や企業・行政関係者らが出席し、懇親を深めた。

主催者を代表して上毛新聞社の内山充社長・主筆があいさつ。起業家が自身の原点を大切にしているという話に胸を打たれたと語り「上毛新聞社は、社会貢献や課題解決模索型報道を掲げているが、原点はわくわくやドキドキを体験すること。もっとわくわくするような新聞社にしていきたい」と話した。

実行委員の5人も登壇。委員長を務めたジンズホールディングスの田中仁CEOは「10回目を迎え、学生の参加が増えてきた。次回のアワードでは、学生に火が付いたものをどう次の時代につないでいけるか考えていきたい」と語った。

協賛企業やGIA歴代ファイナリストらが懇親した交流会

未来へアイデア 豊かに

GUNMA INNOVATION AWARD 2022

食の課題解決に光

総評

5分の1の確率で選ばれた16組は、胸を張ってもらいたい。イベントを支えてくれている群馬の皆さんに敬意を表したい。

今年は「社会課題」「メタバース、デジタルトランスフォーメーション（DX）、環境と経済の好循環を創出するグリーンイノベーション（GI）」など、社会課題の解決に向けたさまざまなテーマが挙げられた。

群馬にとってなじみのある蚕を食糧源として活用したエリーの梶梁除弘さんが大賞に選ばれた。食に新しい風を吹かせ、タンパク質不足という課題の解決に光を見いだしている姿勢が評価された。

新しい力で群馬に、そして日本に活力を吹き込んでいきたい。パネルディスカッションの議論にとどまることなく、具体的に形にしていくことを、発表者や会場にいる全ての皆さんと進められたらと思う。

審査委員長
国領 二郎氏

関東経済産業局長
太田 雄彦氏

若い力に期待

関東経済産業局長舞に輝いた、中央農業大学校の加藤貴代さんの若い力に期待している。優れた技術だと思う。挑戦することは今後の活躍で証明される。「何後あってもしがみついて乗り越えてほしいと思う。

成功をつかむためには、やる気で成功するまで努力することが大切だ。群馬にとってなじみのあるエリーの梶梁除弘さんが有効な概念かも知れないが、若い人が最初から（ワークライフバランスを）求めるのはいかがなものか。大切なのは自分の興味を深掘りすることだ」と指摘。荒井氏も「勉強でもスポーツでも、努力を積み重ねた人が成功する」と答えた。

日本の若者の内向き志向については里見氏が「ダイバーシティ（多様性）の良さを実感できていない人が多い。これは海外に出て行って自分で体験してみるしかない」。一方で鳥越氏は「日本人は『SDGs』という言葉ができるずっと前からプラントベース（植物由来）の食品を食べてきた。海外に迎合し過ぎないことも大切だ」と指摘した。

里見氏はコロナ禍を踏まえ、「病原菌は世界を大きく変えてきた。デジタルシフトは若い人にとってチャンスで、どうやってつかむか考えてほしい」と強調。田中氏は「若い人の生の選択肢の一つに起業を加えてほしい。ぜひこのステージに次世代の人たちに上がってきてほしい」とエールを送った。

華やかにファイナーレを迎えステージ上に勢ぞろいするファイナリストと審査員ら

100人合同ダンスで応援 県内4高校

ファイナリストの発表後、県内4高校のダンス部によるパフォーマンスが会場を盛り上げた。安中総合学園、健大高崎、高崎工業高、樹徳の1～3年生計約100人が、合同ダンスを含めて6演目を披露した。

スタートは「魂舞ソウル」をテーマにしたダンス。生徒たちは本一由さん（44）は「少ない練習の中で各校が並び、激しい踊りでファイナリストを応援する技や青春を感じてほしい」と話していた。

その後は各校が個別の演目でそれぞれの個性を前面に出した。最後は再び合同ダンスで締め、会場から大きな拍手が送られた。

合同ダンスは各校で練習し、本番当日に全体で合わせた。総合演出を手がけた安中総合学園ダンス部顧問の青木一由さんは「少ない練習の中で各校が頑張った。高校生らしい、はつらつとした演技を見せてくれた」と話した。

ステージを盛り上げた安中総合学園高、健大高崎高、高崎工業高、樹徳高の4校によるダンスコラボパフォーマンス

高崎頼政太鼓 迫力の演奏 開幕飾る

オープニングパフォーマンスは、2017年以来5年ぶりに高崎頼政太鼓が務めた。10人のメンバーが力強い演奏を披露し、照明の彩りを加えた迫力ある演出で10度目のイベント開幕を飾った。

さまざまなリズムを組み合わせ、終盤に向けて盛り上がる構成で会場の熱気を高めた。中沢君行会長（51）は「まだこの場所に帰ってきた。気合を入れて頑張りたい」と意気込んでいた。

同太鼓は1976年、高崎市宮元町の住民らで結成した。毎週練習を積み、地元の祭りや行事などで親しまれている。

高崎頼政太鼓の迫力ある演奏で開幕したファイナルステージ

冊子を配布 第10回記念

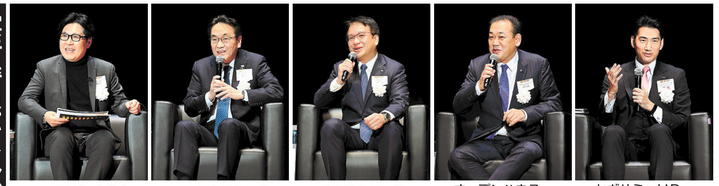
若者のさらなる起業やイノベーションを促し、GIA実行委員会は10回目の節目を記念する特別冊子を作成し、会場で配布した。次代を担う若者に向け、多くの起業家からのメッセージがつづられている。

「チームGIAイノベーションストーリー」と題し、実行委員や特別顧問賛社による起業志望者へのメッセージを載せた。早稲田大ビジネススクールの長谷川博教授や、電通事業共創局の田中康氏による起業の基礎講座も収録する。

過去5回の大賞受賞者や入賞者を紹介するGIAダイジェストも掲載。57組のエントリーだった第1回から、総計548組まで挑戦者が増えた前回までの軌跡を紹介している。電子版も作成し、GIAの公式サイト内で掲載する予定。

来場者に10回目の記念冊子が配布された

実行委員パネルディスカッション



ジンズHD CEO 田中 仁氏
コシダカHD社長 腰高 博氏
相模屋食料社長 鳥越 淳司氏
オープンハウスグループ社長 荒井 正昭氏
セガサミーHDグループCEO 里見 治紀氏

起業を人生の選択肢に

表彰式を前に、実行委員5人によるパネルディスカッション「今、起業家が必要な理由」が開かれた。田中仁実行委員長（ジンズホールディングスCEO）をはじめ、第一線で活躍する起業家や経営者がビジネスの醍醐味やワークライフバランスをテーマに持論を展開。次代を担う若き起業家の登場に期待を込めた。

田中氏以外の登壇者は、コシダカホールディングス社長の腰高博氏、相模屋食料社長の鳥越淳司氏、オープンハウスグループ社長の荒井正昭氏、セガサミーホールディングスグループCEOの里見治紀氏。

エントリー10倍に

10回目を迎えたGIAを巡り、鳥越氏は「最初はここまで大きくなるとは思っていなかった。やってきて本当によかった」と振り返った。里見氏は「東京や大阪でなく、群馬で成功している人がこんなにいる。起業家に勇気を与える起爆剤になっている」とし、田中氏は「10年でエントリー数が10倍に伸びた。GIAをきっかけに起業熱を持った人は多く、地域に貢献できていることは（開業数などの）データからも分かる」と自負した。

「起業家を増やすにはどうしたらいいか」というテーマには、腰高氏が「日本が20年、30年と停滞する中で、若い人に夢を持たせることが重要。成功事例をもっと知ってもらいたい」と指摘した。里見氏は「同調圧力に屈しない人は貴重。リスクを取っていく文化を、どうやってみんなで醸成していくのかという話」と語った。

ビジネスの醍醐味について鳥越氏は「それまで批判していた人たちが『最初からできると思っていた』と、ころっと変わる瞬間がある。見返したいという気持ちがモチベーションにつながる」と説明し、荒井氏は「社長を25年やっているが、最初は役所や銀行で窓口の人にしか会えなかったのが（会社の成長に伴い）偉い人と会えるようになり、偉い人も偉くない人も実は大差ないと気付けた。これが一番面白かった」と語った。

チャンスつかんで

会場からの質問で、米ツイッター社を買収後、従業員に厳しい労働条件を突きつけているイーロン・マスク氏を引き合いに「ワークライフバランスについて問われると、腰高氏は「答えは決まっている。50代後半の人には有効な概念かも知れないが、若い人が最初から（ワークライフバランスを）求めるのはいかがなものか。大切なのは自分の興味を深掘りすることだ」と指摘。荒井氏も「勉強でもスポーツでも、努力を積み重ねた人が成功する」と答えた。

日本の若者の内向き志向については里見氏が「ダイバーシティ（多様性）の良さを実感できていない人が多い。これは海外に出て行って自分で体験してみるしかない」。一方で鳥越氏は「日本人は『SDGs』という言葉ができるずっと前からプラントベース（植物由来）の食品を食べてきた。海外に迎合し過ぎないことも大切だ」と指摘した。

里見氏はコロナ禍を踏まえ、「病原菌は世界を大きく変えてきた。デジタルシフトは若い人にとってチャンスで、どうやってつかむか考えてほしい」と強調。田中氏は「若い人の生の選択肢の一つに起業を加えてほしい。ぜひこのステージに次世代の人たちに上がってきてほしい」とエールを送った。

ファイナリストプレゼン

ビジネスプラン部門 高校生の部

渋川工業高3年 小林 花笑さん、相馬 大輝さん

本県の高校生の自転車事故数が8年連続全国ワースト1位であることを受け、昨年度から電動キックボードの開発を進める。乾電池が動力源の自動車レースで、全国2位の実績を持つ自動車研究部のメンバーの知見も生かした。研究を重ね、走行可能距離や強度を向上。事故多発箇所で速度を制限する機能も付けた。

「発表では力を出し切れた。飲食店と連携したサービスを展開するなど可能性を広げていきたい」と話す。

伊勢崎四ツ葉学園中等教育学校5年 蟻川 宙生さん

関心あるテーマについて探求する授業で、農業や農地から大量に排出され、一般化炭素（CO2）の約200倍強力な温室効果ガスを発生する亜酸化窒素に着目した。前橋工科大や東北大大学院と連携しながら、マメ科の植物から採取でき、亜酸化窒素を除去する根粒菌を使った空気清浄機を企画した。

「CO2の削減だけでは温暖化は防げない」と訴える。今後も新たな製品の開発を続け、社会貢献していきたい考えだ。

ビジネスプラン部門

慶応大2年 渡辺 光祐さん

「仲の良い韓国人がアパートに引っ越す時に手続きが大変だった」。この経験から、外国人留学生専用の家賃保証サービスを考案した。

留学生は必要な保証人を得にくく、物件の選択肢がないという課題がある。日本で就職を目指す留学生に対して提供し、返済が難しくなった場合は、アルバイトを紹介する。

「留学生に対する偏見もある。日本人と同じように社会に出る前に物件を契約できる社会にしたい」と語った。

大学生・専門学校生の部

共愛学園前橋国際大3年 佐藤 陽菜さん

ライブ配信を通じて、従来の固定化された採用活動に新たなイノベーションを起こす「LOOK@MI」の事業展開を提案した。

学生自分のペースな時間にライブ配信する。企業はその様子を見て匿名で質問やコメントをする仕組み。企業側は学生のありのままの姿を知ることができ、入社後のミスマッチの解消につながる。

「現にはまった就活を変え、お互い一緒に働きたい思える場を生み出したい」と力強く語った。

FUTURENAUT 桜井 蓮さん

世界的な人口増加で食肉などの不足が危惧される中、新たなタンパク源として注目される食用コオロギの有用性を力説した。

自動生産システムの開発や食品メーカーとの協業による品質規格の整備により、コオロギを低コストで安定供給できるビジネスモデルを構築。「タンパク質に困らない社会を実現したい」と訴えた。

「アイデア先行ではなく、しっかりと地に足を付けて事業拡大していきたい」と今後を見据えた。

彩園なかや 中屋 智博さん

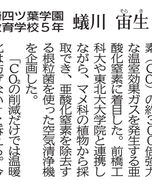
ネギの安全生産を支援する成育予測プログラム「Ａｉｓｔａｔ」を発表した。

品種情報や気象、栽培実績といった統計データを活用して、マネジメントチームが効率的な生産計画を作成。生産者と共有することで、出荷量の安定化を後押しできると強調した。実証実験では、生産日数が約250％向上したという。

「まずは前橋東部地区で実践していく。いずれは前橋、群馬から世界に広げていきたい」と展望した。

ビジネスプラン部門 一般の部

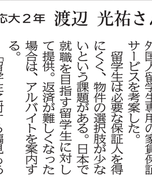
株式会社Fine Feathers 宮川 莉奈さん



妊産婦をサポートするため、ホテルの空室を利用した「産後ケアホテル」を提案した。厚生労働省が掲げる「切れ目ない支援」の実現を目指す。

妊産婦の一番の死因は産後うつによる自殺で、産後4割の女性にうつの傾向がみられる。妊産期から産後、子育てまで支援し、産後うつや虐待の件数を減らすことが目標だ。宮川さんは「行政にできないことを民間ができれば、多くの母親を救うことができる」と意気込む。

INOS代表 小阿瀬 夏子さん

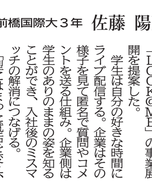


乳幼児を育てる母親向けに、ドライブスルー型の飲食店を提案した。緊急事態宣言時、育児と家事に追われた経験から考案した。

全メニューをライブスルーで購入できる。料理には県産食材を使い、子どもが安心して食べられるように配慮。容器は使い回し可能なポンポット式を取り入れる。

子育て中の母親の心にゆとりをもたらすことを目指す。「入賞は逃したけど、これを見捉えた。

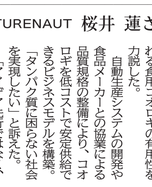
みらい・わたし研究所 松前 博恵さん



インターネット上の仮想空間で、人工知能（AI）を活用し相性の良い人と出会える「マッチングメタバース」を提案した。SNSで簡単に人とつながれる時代にもかかわらず、平均で4人に1人は親友がいない現状に衝撃を受け、誰もが生きやすい社会を作りたいと考えた。

Aが価値観や行動などの五つの基準で相性を判断し、マッチングする。松前さんは「プランを実現するために突き進んでいきたい」と力をみなぎった。

フリーアナウンサー 奈良 のりえさん

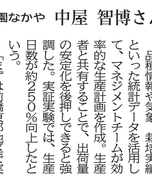


やる気や能力があるのに人前で話すことが苦手で、強みを生かし切れていない人は多い。インターネット上の仮想空間で展開するメタバースサロンでは、そうした人たちが活躍できる場を創出する。

カウンセリングやスクールなど各分野の専門家を配置。自身の経験、「アバター」によりお時間や空間、年齢に関わらず誰でも参加できる。「リアルでなくても生きがいが持てる場所をつくることが大事」と強調。「ナラバース」の世界発信を目指す。

イノベーション部門

大和屋 平湯 聡さん



地球温暖化により、2050年にはコーヒーの生産地が半減する恐れがあると指摘。輸入に頼らない高崎産コーヒーの可能性をアピールした。

コーヒー製造販売の大和屋と農産物生産販売のファームドゥ、障害者を支援するおもつなの3社が協同。低価格で高品質なコーヒーを生産するだけでなく、遊休農地の活用や障害者雇用にもつなげる。

「コーヒー文化を次世代につなげることが使命だ」と訴えた。

GUNMA INNOVATION AWARD 2022／10th ANNIVERSARY　起業家発掘プロジェクト「群馬イノベーションアワード2022」に協賛しています。（順不同）

JINS HOLDINGS　株式会社コシダカホールディングス　相模屋食料株式会社　OPEN HOUSE GROUP　SEGASammy
SMBC日興証券　北群馬信用金庫　桐生信用金庫　群馬銀行　群馬県信用保証協会
しののめ信用金庫　大和証券　高崎信用金庫　東京海上日動　東和銀行　利根郡信用金庫
冬木工業株式会社　糸井商事　Farmdo group　MAKEONE　Deloitte. デロイト トーマツ
日本政策金融公庫　野村證券　MIZUHO　みずほ銀行　みずほ証券　三井住友銀行　三菱UFJモルガン・スタンレー証券
株式会社相川管理　AKAO 赤尾商事株式会社　ASAHI　altostar　石井設計　石川建設
オネスティーハウス石田屋　USUI　ウベハウス東日本　NTT東日本　emu salon　大塚商会
オオラ美装株式会社　株式会社小淵警備保障　オルビス　共愛学園前橋国際大学　ELSPINA　クスリのマルエ
CLIMB　グルメフレッシュ・フーズ　群成舎　群馬トヨタ自動車　株式会社 晃希
KOEI コーエー株式会社　国際警備株式会社　ゴダイ　水と生きる SUNTORY　JAOS　ジャングルデリバリー
高崎健康福祉大学　佐藤眼科　TAKARA CORPORATION　田子会計事務所　中央カレッジグループ　駐車場をさがせ
永井酒造株式会社　株式会社西建　花助　美喜仁　PIZZERIA PESCA!
広田住宅センター　富士スバル　プリエッセ　Primavera　Vortex　前橋園芸株式会社
BeBRICK　宮下工業株式会社　メモリード　ヤマト　ユナ厨房　リクルート 北関東マーケティング